

1. 単元名 「陶硯をつくる 墨を磨る 墨で描く」

2. 単元の目標

- ・墨の濃淡の色彩がもたらす効果を理解し、活動を通して感じたり考えたりした自分の気持ちを全体のイメージで捉えることを理解している（知識）
- ・陶硯を使って墨を磨ることや調墨することを身につけ、意図に応じて工夫して表している（技能）
- ・活動で感じたことや考えたことを元に主題を生み出し、創造的な構成を工夫し心豊かに表現する構想を練っている（思考・判断・表現）
- ・美術の創造活動の喜びを味わい、楽しく主題を元に墨の持つ魅力を生かそうする表現活動に取り組もうとしている（主体的に学習に取り組む態度）

3. 単元について

(1) 教材観

本題材は、①「握り墨づくり」、②「陶硯制作」、③「墨画制作」の3つの段階で構成されている。①の段階は総合学習、②、③の段階は美術科の学習で、教科横断型の学びとなっている。

①の握り墨づくりの段階は、1年生の総合学習で実施し、生産者の方にお話を伺いながら握り墨を作る活動を通して、奈良の地域の伝統産業である奈良墨について学んだ。この学びは、SDGsの17のターゲットのうち、11における「世界の文化遺産や自然遺産を保護し、保っていくための努力を強化する」、12における「持続可能な開発や、自然と調和した暮らし方に関する情報と意識を持つようにする」などとの関連があると考えられ、生徒がESDの視点をもとに、考えを深める機会となった。

この総合学習の中で、生徒は1人一つの握り墨を作ったのだが、墨を作るだけで終わらず実際に使うことでさらに学びが深まる効果が期待できるのではないかと考えたところから、本題材の構想が生まれていった。

次に、②、③の段階について述べたいと思う。

本題材は、自作の握り墨と陶硯を使って墨画を描く表現分野の実践である。陶硯とは、陶製の硯のことである。硯といえば、現代では石製のものが多く、陶製の硯を身近に見ることはあまりないが、古代日本では広く使用されていたことが日本各地から出土した資料から明らかにされている。その中でも、奈良教育大附属中学校（以下、附属中学校と表記）が所在する奈良県奈良市の平城宮跡からは多くの陶硯が出土しており、奈良時代最大の陶硯の消費地であると言われている¹⁾。

②の陶硯を制作する段階では、陶土による造形の面白さや釉薬の発色などの焼き物の魅力について理解していく。当該学年の生徒は、これまで絵画表現を中心に美術科の学習を行っており、本題材が初めての陶芸の学習となる。焼き物の作り方や釉薬の発色の仕組みなど、基礎的な陶芸の技法を理解するとともに、陶土の可塑性を生かした造形を豊かに発想する機会となればと考えた。

次に、③の陶硯を使用して墨画を描く段階では、墨の濃淡に見られる色味の美しさや和紙に滲む効果

などを感じながら、墨画表現を楽しむ。墨画に見られる墨の濃淡の色味や和紙に滲む効果による表現は、アクリル絵の具や水彩絵の具とは異なる独自の魅力を持っている。中国や朝鮮半島から日本へ伝わってきた墨画は、日本美術史においても重要な表現方法であり、墨画の技法を用いた題材は、中学校美術科の教科書²⁾でも取り上げられている。教科書の該当箇所を見ると、「墨と水の出会い」というタイトルと共に、造形的な視点として「水加減による墨の濃淡や筆の線の勢いになどに着目し、墨による表現の効果をとらえ、墨の技法などを工夫して表す」とあり、発想・構想・鑑賞の視点として「墨による表現の特性やイメージなどをもとに、筆使いや水加減の工夫を考え、構想を練ったり鑑賞したりする」という内容が示されている。

本題材を、生徒が描画材と表現が深く関連していることについて経験的に考える機会とし、また、奈良という地域の歴史と深く関わる材料や道具を使うことによる思考の深まりを期待したい。

(2) 生徒観

附属中学校の在校生を見ると、好奇心が強く好きなことに没頭する性質を持っている生徒が多い印象を受ける。また、関心のある分野以外についても、学びの機会を与えれば興味を持って取り組んだり自ら学びを深めようとしたりする姿勢を持っている。一方で、自分の考えに自信を持って発表したり、表現したりすることに関しては消極的な生徒が見られ、様々な学習を経験して得た自身の思考を他者に向けて発信する場面を作る必要があると思われる。

本題材で対象とした2年生は、学年全体の雰囲気としては穏やかな集団である。自分の意見をはっきりと表明したり、積極的に表現したりすることについては苦手意識を持っている生徒がやや多いが、男女の区別なく交流することができ、他者を尊重する気持ちを持っている。本題材は、総合学習の握り墨づくりや陶硯制作など、ほとんどの生徒が初めて体験する学習内容を含んでいる。活動中には、初めての体験で感じた良さや面白さを、友だちと自然に共有できる場面がある。友だちと共に体験的に学びを進めながら、作品を通して自分の思いを表出することで、言語だけではない自己表現の機会となればと思う。

(3) 指導観

本題材の指導にあたっては、まず、制作に使用する道具を自分で作ることで、作品を作り出す根源的な面白さを感じられるようにした。生徒たちは、普段既製品に囲まれて生活しており、意識的に行動しない限り自分たちが使っているものを作っている人と接することができない。自分が手にしている様々なものが勝手に出来上がったものではなく、そこには多くの人や資源が関わっていることを実感的に理解できれば、思いを込めて作品制作に取り組めるのではないかと考えた。特に、墨や硯など地域の歴史や文化に根ざした製品は、その背景と共に理解することで自分ごととして受け入れやすいのではないかと思う。総合学習で実際に墨づくりの職人の方にお話をしていただいたことで、生徒たちは製品に関わる人の生きた声を聞き、自分が使う道具について思考を深めることができたと思われる。

美術科で行った陶硯制作と墨画制作は、道具作りと自作の道具を使った表現活動である。はじめに行った陶硯制作の活動は、工芸分野の学習として陶芸の技法によるものづくりについて考える機会となるように設定した。陶土を成型する工程や素焼きの硯に釉薬をかける工程を行うことで、身の回りの道具がどのように作られているのかを実感し、道具に対して愛着を感じるができるようにした。

次に、墨画制作では、墨を磨る工程を丁寧に指導するように心がけた。本校の書写の時間では墨を磨らず、墨汁を使用している。墨を磨る時の墨と硯があたる感覚や、徐々に現れる墨の色みや艶、光沢の美しさなどは、実際に墨を磨ることでしか経験のできないものである。また、墨に練り込まれている香料の独特の香りなどは、視覚以外の五感に働きかけて生徒の心を豊かにする効果があると思われる。墨画の主題は2年生2学期で実施した総合学習「奈良めぐり」の経験から生み出した。奈良という地域をフィールドに行った学習を通して様々な人々に出会った生徒たちが、自分の経験の中でどのようなことを感じ、考えたのかを絵手紙の形式を用い、絵と文字で表現した。絵と文字に表された墨の濃淡の美しさを見ることで、総合学習と美術科で行った学びが生徒の心に息づき、造形的な視点から活動を捉え直す効果を期待した。

(4) ESD との関連

・本学習で働かせる ESD の視点 (見方・考え方)

多様性：奈良墨は、奈良という地域で、人々が守り育んできた独自の歴史であり文化である。今を生きる私たちがそれらを未来へつなぐ役割を果たすことで、地域における多様な文化を守ることができるということ。また、それを使って作品を制作することで、作品に表される個々の表現の良さを認め合うことができるということ。

有限性：伝統産業は、後継者不足など様々な問題に直面し、技術を守り続けることの難しさを抱えている。生産者の声を聞き、実際に作ったり使ったりすることで、文化を守る当事者となるということ。

相互性：墨と硯を自作することを通して、私たちが使っている道具は様々な人が関わって作られていると知り、人との、人と人のつながりについて考えることができるということ。

・本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

多面的、総合的に考える力：

墨、硯といった道具一つをとっても、道具の歴史、地域の歴史、それらに関わる生産者、使用者としての自分たちなど、様々な人、こと、ものの関わりを理解することができる。奈良という地域が守り育んできた文化を知り、その文化と共に生きるということ、作品制作を通して考える。墨の色彩の魅力や表現の面白さを感じ、墨という材料を使って表現することの楽しさを感じる。

つながりを尊重する態度：

総合学習「奈良めぐり」で様々な人と出会う経験をすることで、地域の文化や歴史を大切に守ろうとする人々の気持ちを理解すること。墨・硯を自作し実際に使ってみることで、道具や材料を作っている人の気持ちに思いをはせ、材料や道具と作品の関係について考えを深める。

進んで参加する態度：

総合学習の学びから主題を生み出し、材料や道具を生かした作品づくりに主体的に参加しようとする態度を育てる。

・本学習で変容を促す ESD の価値観

世代間の公正：

地域の人々が守り育んできた文化について理解し、良さを認め、次世代に繋いでいこうとする気

持ちを持つ。ものづくりに携わる人々の気持ちを思い、消費者の立場だけではなく様々な立場の人々の気持ちになって考え行動できるようになる。

人権・文化を尊重する

自分たちの暮らす地域の文化や風習について理解すると共に、他の地域や国には異なる文化や風習があるが、それも自分たちのものと同様に大切にされるべきものだという気持ちを育てる。

・達成が期待される SDGs

11 (11-4) 世界の文化遺産や自然遺産を保護し、保っていくための努力を強化する。

12 (12-8) 人びとがあらゆる場所で、持続可能な開発や、自然と調和した暮らし方に関する情報と意識を持つようにする。

4. 単元の評価規準

(ア)知識及び技能	(イ)思考力・判断力・表現力等	(ウ)主体的に学習に取り組む態度
①陶芸の技法や陶土・釉薬の性質、道具の扱い方を理解している ②墨や陶硯の性質を生かし、意図に応じて自分の表現方法を追求し、創造的に表している	①陶硯の機能性と、形や釉薬の色との調和について考え、表現を行っている ②墨の色みの美しさや濃淡で描かれた表現の意図と創造的な工夫について考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練っている。 ③表現の意図をふまえ、墨による表現の美しさを味わい、見方・感じ方を深めている。	①陶芸の技法で硯をつくる過程を楽しみ、自分なりの作品を生み出そうとしている ②墨の色みや濃淡を生かした作品づくりや鑑賞の学習活動に主体的に取り組もうとしている ③自分の作品や友だちの作品の良さや美しさを造形的な見方で楽しく味わうことができる

5. 単元の指導計画（全9時間）

陶硯制作：3時間 墨画制作：6時間 鑑賞：1時間 *握り墨づくりは総合学習のため含まない

学習活動	○学習への支援	○評価・備考
1. 陶硯制作（成型） ・陶芸技法の基本と陶土の性質を理解する ・硯の機能と形の特徴を理解する ・陶芸の道具の扱い方を理解する ・陶硯の機能性と、形や釉薬の色との調和について考え、陶土を練って硯の形に成型する	○陶芸の技法の基本的な知識について説明する ○硯の機能、形について説明する。特に陶硯については歴史とともに紹介し、地域にゆかりのあるものであることを認識させる ○生徒が発想した形を実現できるよう適宜助言する。 ○成型ができれば水分状態を管理しながら乾燥させる	○(ア)① ○(イ)① ○(ウ)①

<p>2. 陶硯制作（成型）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成型後、乾燥が進んだ状態の陶硯を、道具を使って削り、海陸（墨を磨るところと墨を溜めるところ）を作る ・削ったり彫ったりして形を整える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○道具の扱い方を説明する ○機能性を考えて海陸を削るように注意する ○表現の意図をを考えて削ったり彫ったりの加工を行うように促す 	<ul style="list-style-type: none"> ○(ア)① ○(イ)① ○(ウ)①
<p>3. 陶硯制作（釉薬がけ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・釉薬の性質・道具の扱い方を理解する ・陶硯の形と釉薬の色との調和について考え、釉薬がけを行う 	<ul style="list-style-type: none"> ○釉薬の性質・道具の扱い方を説明し、釉薬の性質を生かして発想を深めることができるように促す ○道具の扱い方、釉薬のかけ方を説明する 	<ul style="list-style-type: none"> ○(ア)① ○(イ)① ○(ウ)①
<p>4. 墨画制作（硯面の準備・墨を磨る）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・硯面をやすりがけして整える ・握り墨を磨ってみる ・調墨を試す 	<ul style="list-style-type: none"> ○硯面と墨のあたり方の仕組みを説明する ○墨の成分と調墨の方法について説明する ○墨の色の美しさや濃淡の違いによる印象の変化を味わいながら墨を磨るように促す 	<ul style="list-style-type: none"> ○(ア)② ○(ウ)②
<p>5～6. 墨画制作（アイデアスケッチ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・奈良めぐりの経験を振り返り、感じたこと、考えたことを主題としてアイデアスケッチを行う ・絵手紙の形式を理解し、主題に応じた構図を考える 	<ul style="list-style-type: none"> ○奈良めぐりでの学びを振り返り、感じたことや考えたことを絵手紙の形式で表現することを説明する ○資料集、実物資料等を利用して絵手紙の形式についてイメージを持たせる ○地域をフィールドとした学びの中で、自分が何を感じ考えたのか、自己の変容を振り返りながら考えを深めるように促す ○主題に応じてイメージをスケッチとして表すことができるように、当日の活動写真等を用意して援助する 	<ul style="list-style-type: none"> ○(イ)② ○(ウ)②
<p>7～9. 墨画制作（墨絵描写）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・墨の性質を生かし、主題をもとに自分の表現方法を追求し、創造的に表している。 ・調墨の技法を身につけ、墨の濃淡を意識した画面づくりを行う ・文字の形や配置と余白とのバランスを意識し、スケッチとの調和を考えて描画を行う 	<ul style="list-style-type: none"> ○墨の性質を理解し表現につなげることができるように促す ○調墨がうまくできない生徒がいる場合は、適宜指導を重ねる ○文字の形や配置、余白との関係を意識するように、資料等を準備して理解を促す 	<ul style="list-style-type: none"> ○(ア)② ○(イ)② ○(ウ)②
<p>10. 鑑賞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作品を相互鑑賞する ・作品に表された主題をもとに、墨色の美しさや文字とスケッチのバランスを考えながら作品を味わう 	<ul style="list-style-type: none"> ○互いの作品の良さを見つけることができるように、対話をしながら鑑賞を進めることができるようにする ○主題について考えながら墨の表現の造形的な魅力を味わうように促す 	<ul style="list-style-type: none"> ○(イ)③ ○(ウ)③

6. 成果と課題

(1) 成果

実践を終えて成果を検討するにあたり、本題材の意義を振り返ると、総合学習と美術科による教科道断型の学習を実施したこと、その学びの内容や学習のあり方を ESD の視点で捉えることで、美術科における ESD 的題材の学習デザインの示唆を得たことの 2 点があげられるのではないかと思う。

本題材は総合学習の握り墨づくり体験が構想のきっかけとなり、いわば偶然に始まったのだが、墨を軸にして陶硯制作、墨画制作と、自然に教科の学習へ内容をつなげていくことができた。このように学びが自然に広がっていったことを ESD の視点で捉え直すことで、美術科と ESD の関わりについて考え、今後の ESD 的題材の学習デザインに活かすことができるのではないかと考えた。

まず、教科横断型の学習としての本題材の成果については、墨づくりの段階を総合学習で、陶硯を作り、それらを使用して制作を行う段階を美術科で、というように段階によって教科を分けたことによって、それぞれの段階の学習目標を明確にできたことをあげておきたい。1 年生次の総合学習で墨づくりの職人の方にお話を伺った際、オンラインではあったが、実際の作業場所を見せていただいたり作業用の機械を見せていただいたりすることができた。握り墨づくり体験では、まだ温かく柔らかい墨の塊を手で練る感触や混ぜ込まれた香料の香りなどを、視覚以外の五感を使って感じる事ができた。これらの体験は、墨という材料が人の手によって作られたものだということを生徒に実感させた。さらに、墨づくりの職人の方の生の声を聞くことで、奈良という地域で守り育まれてきた文化について、それを次世代に伝えていくことの大切さを考えることができた。美術科の題材の中に墨づくりの段階を取り入れることは難しくないと思うが、その場合は、学習目標が美術科の視点で設定されるため、総合学習で行う場合と異なってくることが考えられる。本題材で、墨づくりを総合学習で行い、墨を使った表現活動を美術科で行うというように、段階によって教科を分けたことで、学習目標を明確に分けることができ、結果として学びの幅が広がることになった。

先に記述したように、墨づくりの段階において変容を促す ESD の価値観は「世代間の公正」であると考えているが、この価値観について美術科の教科内容から迫ろうとすると、どうしても造形的な視点が弱くなってしまう。事象を造形的な視点で捉え、美しさや良さを味わい、見方・考え方を深めることは、美術科ならではの学びである。本題材では、文化や人を次世代につなごうとする気持ちを育てる部分を総合学習で行ったことで、美術科ならではの学びと両立させることができたと思う。

次に、学びの内容や学習のあり方を ESD の視点で捉えることで、美術科における ESD 的題材の学習デザインの示唆を得たことについて述べていきたい。

本題材で行った美術科の学習内容は、工芸分野の陶硯制作と、絵画分野の墨画制作である。

工芸分野の陶硯制作においては、陶芸の技法について学ぶとともに、実際に陶土と釉薬を扱い、硯という伝統的な道具を自作した。美術科では、絵の具などの画材を自作する題材は資料集等にも記載があり、実践例があるが、硯のような道具を自作する実践例はあまり多くない。本題材では、硯を自作することで、生徒の道具を大切に扱う気持ちを育てたり、道具の特性に対する理解を深めて制作に生かしたりできるようにしたいと考えた。これを ESD の視点で見ると、「有限性」に関する思考を深めることにつながると思われる。

絵画分野の墨画制作は、主題を生み出す段階に ESD の視点があると思う。今回の墨画のテーマは「奈良めぐりで感じたこと」とした。総合学習「奈良めぐり」は、地域の人々と出会い、話を聞いたり

一緒に活動したりすることを通して、問いを生み思考を深める学習である。美術科では、奈良めぐりで経験したことを振り返り、自分の中に生まれた思いを主題としてスケッチと文字で表した。ここで見られる ESD の視点は「多様性」や「相互性」である。生徒は、奈良めぐりの活動に関わった人々や、ともに学んだ教師や友だちとの意見の交流を通して、さまざまな人々の個々の考えに触れ、自分と他者の関係や自分と社会の関係について思考した。

これらの学習内容を ESD の視点で捉え直してみてもわかったことは、題材の中に陶硯制作のような「ものづくり」の内容を含むことの意義と、主題を生み出すもとなる活動に ESD 的視点を見出すことの大切さである。「ものづくり」は、実感を伴う活動を生み出しやすく、生徒が自分ごととして考えるきっかけを作ってくれる活動にデザインしやすい。主題のもとになる活動には様々なものが考えられるが、今回のような学校行事的な活動であれば、活動目標に ESD の視点を持つことで他の教科への横断的な広がりが期待できる。これまで実践してきた題材も、今回のように ESD の視点で捉え直すことで、新たな題材としてデザインし直すことができるのではないかと思う。

(2) 課題

本題材を終えて感じた課題は、題材を全て終えるまでにかかる時間が長いということである。美術科は年間時間数が1年生45時間、2・3年生は35時間である。今回の題材では、総合学習と教科横断型で行ったため、墨作りの時間を教科から出す必要がなく、時数を短縮することができた。ESD の視点をもとにした題材は、丁寧な導入や対話のための時間を確保することで学びが深まると思われる。今後題材づくりを行う際には、学習目標を明確にして、他教科との連携を有効に行っていくことも大切であると思う。

内容に関しては、美術科の学習内容を ESD の視点で捉え直しておくことが有効であると感じた。美術科の活動は、大きく表現と鑑賞に分けられ、それぞれの中に「感じ取ったことや考えたことを基に絵や彫刻に表現する」活動と「伝える、使うなどの目的や機能を考え、デザインや工芸などに表現する」活動が含まれる。成果の中でも述べた「ものづくり」は、デザインや工芸の分野と親和性が高いが、絵や彫刻の分野にも ESD の視点は含まれていると思う。教科書や資料集の内容を改めて検討したり、美術科や図画工作科の教員間で ESD の視点を基にこれまでの題材について検討を行ったりすることで、今後新しい題材作りについて考えるきっかけが生まれるのではないかと思う。

最後に、今後の展望として、異校種の連携や地域との連携を、授業づくりに積極的に取り入れることをあげておきたい。本題材を実施することができたのは、中学校と大学、中学校と地域などの連携によるところが大きい。中学校だけではできないことも、様々な機関との連携すること実現できる場合が多いので、機関とのつながり、人とのつながりを大切にして今後の題材づくりを進めていきたいと思う。